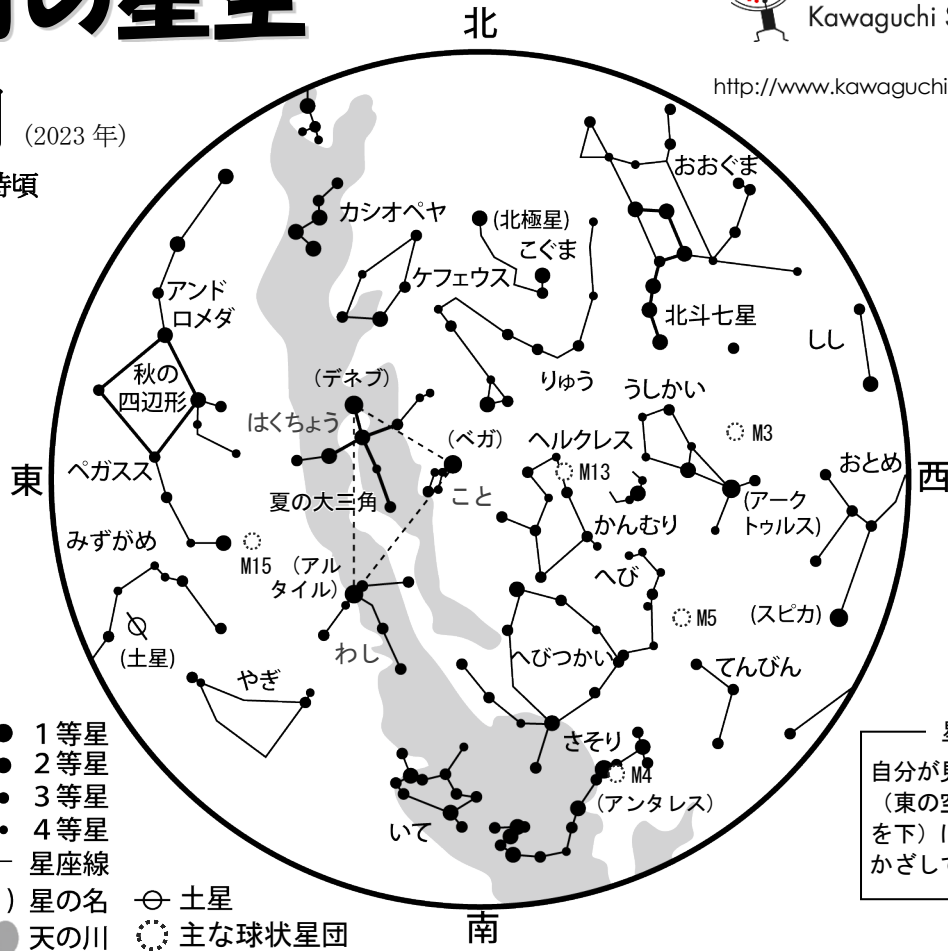


# 今月の星空

8月 (2023年)

中旬 20 時頃



星図の見方  
自分が見ている方向を下  
(東の空を見るときは東  
を下)にして、頭の上にかざして見ます。

月 齢 ○満月 2日・31日、●下弦 8日、●新月 16日、●上弦 24日

惑星情報 金星 日の出前 東(かに座 -4等)※25日以降

木星 日の出前 南東→南(おひつじ座 -2→-3等) 土星 真夜中 南(みずがめ座 1→0等)

## ★天の川にかかる夏の星座～星空を見比べてみよう～

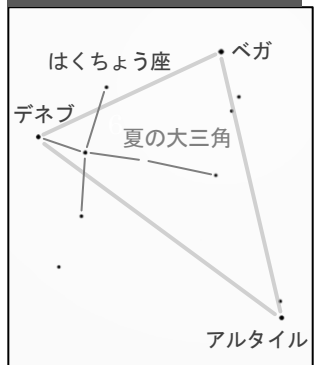
22日は旧暦7月7日にあたり「伝統的七夕」と呼ばれます。ベガ(織姫星)、アルタイル(彦星)、デネブでつくる夏の大三角が天の川とともに高く昇り、七夕の星や夏の星座が見ごろの時期です。天頂付近から天の川を南に下れば、1等星のアンタレスが目印のさそり座やいて座が見つかります。両星座とも市街地でも見える2~3等の星が密に並ぶ見つけやすい夏の星座です。また、東の空には土星が昇ってきました。27日に衝<sup>しゅ</sup>を迎え、観望好機となります。

さて、郊外へ出かける機会も増える夏休みには、色々な場所で星空を見比べてみましょう。右図は、夏の大三角付近の星を3等まで見える市街地(上)と4等まで見える郊外(下)で比べたものです。市街地では11個の星が見えるのに対して、郊外では40個以上見え、や座やいるか座も見えるようになります。※衝<sup>しゅ</sup>…地球から見て惑星が太陽の反対側に来るとき。地球に最も近づき明るく見える。

## ★夏の夜空の風物詩「ペルセウス座流星群」を見てみよう

ペルセウス座流星群が13日17時頃に極大を迎えます。市街地でも観察が期待できる出現数の多い三大流星群<sup>さんだいりゅうせいぐん</sup>であり、その中で唯一暖かい夏に出現する流星群です。観察に適した日は極大前後の11日~14日の4夜。見ごろの時間帯は、いずれも21時頃から夜明け前まで。特に放射点が高くなる夜半過ぎから夜明け前にかけて数が増えます。最も多くの出現が予想されるのは14日の夜明け前(午前3時台)で、空の暗い場所では1時間に30個程度となります。市街地で観察する場合は、空の暗い場所に比べて、見られる数が数分の1に減

(a) 市街地の星空(3.4等まで)



(b) 郊外の星空(4.4等まで)

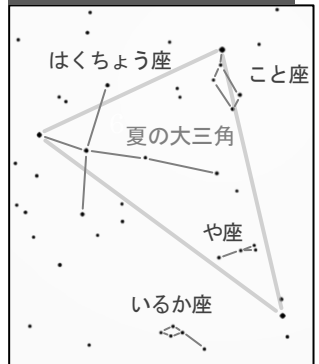


図 夏の大三角付近の星図

るため、出現数が最も多いと予想される13日の夜から14日の夜明け前までがねらい目となります。

※三大流星群…しぶんぎ座流星群(1月)、ペルセウス座流星群(8月)、ふたご座流星群(12月)